熊本大学学術リポジトリ

和歌七首 ： 文苑

著者	吉田，豐，下村，光
雑誌名	龍南會雑誌
巻	１４
ページ	３８-３９
発行年	1893-02-27
URL	http://hdl.handle.net/2298/4023

梧園先生日和氣謂如又曰奇趣

都門山廓歲新初瑞氣今朝一樣舒傾盡三杯椒栢酒酡顏先作奉親書

除夕　同　同

拂塵聲裡夕陽天喧語猶聞市店邊吾儕無家欲何掃胸襟一洗入新年

瓶中水仙　同　水月仲丸

一種芬芳無俗塵氷肌仙骨見天眞桃前梅後占春者自是水晶宮裏身

又　同　黑板勝美

桃前梅後獨知春楚々寒香自絕塵應是水晶宮裡客仙風道骨見天眞

景季箙梅圖　同　隈本繁吉

被髮如雲美少年箙中挿得百花仙騂而有角君休咎芳志長傳一谷邊

秋夜書感　川本良樹

凄凉伴短檠半夜衆虫鳴如訴將如泣聞爲種々聲

寒夜偶成　補充一級　澤村晴夫

燈明四座酒盈缸一片壯心猶未降慷慨悲歌提劍舞朔風吹雪入寒窓

紀元節　硯友會員　吉田豐

年のはにのどけきものとかし原の御代をし祝ふけふの心か

霞立つ春日のとかにかし原の宮に御代をはしろしめしけむ　同　下村光

万代もうごろぬ國のみはしらを立てましゝ日を覩ふゞふかな　同　同

曉梅　同　同

はるさめのはをてしつけき曉に紛やのひまもるまとの梅か香

有明の月の光もかすかにてをはろにほふ軒の梅か香　同　吉田豐

蒙古襲來

いきつしまとふりし仇もなにゝせむ筑紫の海のもくつとそなる　同　下村光

神風にしつみし仇の澤なをは千ひろのうみもあせやしにゝむ

雜報

○春色動　年改て煙暗澹雨蒙茸、吾人は寒齊春色の沈々として來る遲さを歎じたりき、然れども太昊巳に規を執ま歌君連ぢに律を吹く、北帝如何に貪婪剛愎なると雖是に至てそれ避易の情なからんや、東風細かにして流漾々、蘇岳は半と殘雪の冠を脱して、龍山全く陰雲の封を排り、梅芳方に薫して淡々たる輕煙に染み、柳眼漸く新にして薙々たる靄色を帶ぶ、綿蠻たる黃鳥は彼の丘に啼き、躍如たる胡蝶亦た將さに此野ま舞はんとす、春色是に於てか動きぬ、試ミに吟歩を郊外に轉せんか、照々たる風光汝が眼を照らさん、欣々たる萬象汝が心に映せん、醫腦散じ